

「日録第一」ノモンハン作戦詳録

目次

- (一) 高射砲隊の戦線投入
- (二) 高射砲隊配置地域
- (三) 地上より見たる蘇空軍の戦法
- (四) 我高射砲兵隊の戦績
- (五) 戦例

一、高射砲隊戦線投入

ノ 第一次ノモンハン事件

独立高射砲二箇中隊が派遣された。

2 第二次ノモンハン事件

初期独立高射砲一箇中隊、高射砲第十二聯隊の高射砲二箇中隊、

高射砲第十聯隊長の指揮する高射砲二ヶ中隊が増強せられた。

次に蘇軍の大反攻開始直前独立高射砲中隊三箇中隊、高射砲第九

聯隊長の指揮する高射砲二箇中隊、高射砲第十三聯隊長の指揮す

る高射砲二箇中隊が夫々増派せられた。

三、高射砲隊配置地域は次の通りであつた。

ノモンハン戦線

海拉爾附近

アロンハルシヤン附近

ハンダカヤ附近

白城子飛行場建設

ノモンハン線線の兵力は七月始め独立高射砲二箇隊次第で更に二箇
中隊が増強せられ七月八日頃高射砲第十聯隊長の指揮する高射砲二
箇中隊が増派せられ計六箇中隊となり之を高射砲第十聯隊長が統一
指揮した。

地上より見たる蘇空軍の戦法

ノモンハン戦國に關する研究調査員五十嵐勝吉申佐が記憶せる蘇空
軍戦法は次の如くであつた。

八編逐機の戦法

(1) 戦場に現出した敵編逐機の種類は
H-18 型 W16 型 ツエカーペ編逐機で
あつた。

(2) 戦法

(A) 大編隊を以てする強襲又は急襲を以て奇襲を行つた。
(B) 編逐機の主要なる攻撃目標は次の通りであつた。

砲兵陣地特に高射砲陣地

司令部の指揮機關

馬及車輛部隊特に乗用車

氣球

飛行場

觀察及糧秣集積所、病院

② 對地攻撃の要領

(A) 谷地又は低地を利用し連続攻撃を行つた。

(B) 中等高度（二千米）にて編隊を以て襲撃目標に接近し次で編隊を解き数方向又は一列縦隊にて交互に攻撃した。

(C) 敵機は機銃砲及機銃砲を装備し機銃砲として榴霰及焼夷砲を使用した。又小口径機銃を装備せるものもあつた。射撃精度は一般に良好ではなかつたが、戦闘の初期に於ては日本軍將兵に對する精神的脅威が大きかつた。

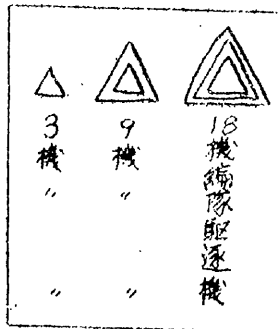
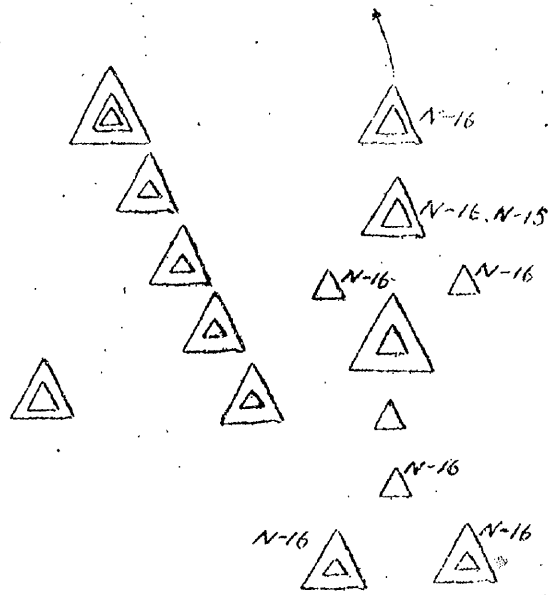
(一) 飛行場の攻撃に方つては我が飛行機の離陸に迫尾し又は我が飛行場附近に潜入し我が飛行機の離陸時に乗じ急襲する戦法を採つた。滿洲特に此の戦場が此の種戦法に適する地形であつた。

(四) 我高射砲の射撃に会い其の射撃を前方に見ると敵機の約三分の一は方向を变换し之を回避した。

高射砲の爲屢々墜せられた結果高射砲に對しては反覆攻撃することが尠かつたが他の部隊に對しては執拗に攻撃を復行するを常とした。

(四) 氣球攻撃に方つては氣球の高度高き場合は急進して接近し上昇して攻撃する。又好んで高射砲陣地の反対側より攻撃した

(二) 對地攻撃の目的を有しない場合に於ては通常我が高射砲の威力圏の外周を飛行し誤つて我が威力圏に入り射撃に会つた場合は輕快なる回避行動を行いつゝ逃避するに努めた。



(例) 驅逐機を以て偵察又は砲兵協力を行つた。
 (例) 驅逐機の接敵隊形の一例を图示すると次の通りであつた。

2. 爆撃機の用法

(1) 戦場に現れた敵爆撃機の種類はO'D型、テ、ト、爆撃機であった。

(2) 数十機の大編隊又は六乃至九機の小編隊を以て水平爆撃を行う。

夜間は通常単機に依る爆撃を実施する。

(3) 爆撃高度は戦闘の初期は三四千米であつたが高射砲の射撃により

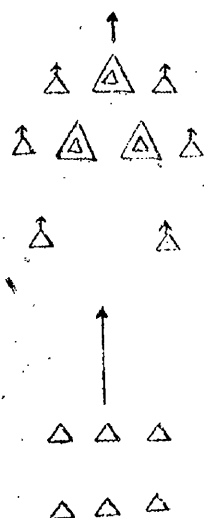
り屢く墜せられたので通常六、七千米に達し最後には八千米

以上に及んだ。

爆撃の爲の進入方向は太陽を脊にして進入したことが多い。

夜間の爆撃高度は千五百乃至二千米の様であつた。

(4) 晝間に於ける爆撃隊形の一例



備考

△ 9機編隊の爆撃機

△ 3機

↑ N-16 3機編隊

(*) 爆撃機の主要な爆撃目標は次の通りであつた。

(A) 砲兵陣地

(B) 司令部等の指揮機關

(C) 飛行場

(D) 集積所

(E) 停車場、列車（アルシヤン方面）

(F) 橋 梁

(*) 夜間爆撃の目標は戦場後方の擾亂を企図するものゝ如く屢々之を敢行し隨所に爆弾を投下した。爆撃開始前照明弾を投下することがあつた。

(*) 爆撃の精度及其の効果

我が高射砲の射撃の結果敵機の爆撃高度が益々高くなつた關係上爆撃精度は一般に良好ではなかつた。又其の物質的效果は僅少であつた。爆弾は各種のものを使用した様で彈痕の大きさも

徑七、八米深さ一米五十糎内外のものより徑一米内外深さ五〇糎内外のものがあった。又銚彈の外夜間コンクリート爆弾を使用したものもある。

高射砲の射撃を受けた場合爆撃実施前に在つては編隊を解くことは少いが爆撃後は速かに編隊を解いて逃避する。時として我射撃を受けると直に其の場に爆弾を投下して逃避したことがある。逃避の要領は我が射撃高度高き時は急に降下し低き時は急に高度を上げる。

爆撃開始前には我高射砲の威力圏に進入すると緩除を蛇行又は波状飛行で行うのが常であつた。

3. 敵の飛行機と砲兵との協同戦斗

驅逐機の攻撃に引続き直に我高射砲陣地に對し敵の地上砲兵の集中射撃を受けた場合がある。是れは驅逐機の低空攻撃に依つて砲兵に目標を指示する行動であつた。又敵爆撃機の懸場に出現する

や敵の地上砲兵は直に我が高射砲兵に射撃を実施した。
 敵飛行部隊は又空軍的用法を以て我が空中勢力の撃滅戦を敢行し
 た。一面緊密に地上作戦部隊に協同した様である。

よ之は要するに今次戦闘は兩者共に戦争不擴大方針に基く圍境確保
 の政略戦であつた關係上飛行機に依る攻撃の重点が概ね戰場及其
 の後方若干の地域に限定したのが特性である。將來に於ける眞面
 目の戦争に於ては開戦後後方要地の爆撃を電光石火的に敢
 行し其の攻撃方法も爆撃のみに止らず瓦斯雨下、細菌投下、落下
 傘挺進隊の降下等を随時随所に敢行すべきを豫想せられる。

四 我高射砲兵隊の懸念

今次ノモンハン事件に於ては相當の兵力を有する高射砲兵群を（七
 月上旬から八月下旬に至る期間にノモンハン方面のみに配置された
 ものが高射砲二十四門でハイラル、ハロンアルシヤン方面及九月以
 降停戦協定成立に至る間戰場に増加せられた部隊を加えると其の兵

力は百二十門を以て優越を敵空軍に對し戰鬥を実施した。是は日本軍高射砲兵創立以來最初のことであつた。

從來高射砲兵の價値に關し兎角の批評や論議があつたが約二ヶ月の期間中ノモンハン方面のみに於て能く敵機百三十五機を撃墜し友軍の心氣を鼓舞し又敵爆撃機の高度を概ね五、六千米以上に追い上げ以て敵機の精密探察を斷念させ以て敵機を驅逐してその精密探察を困難ならしめる等その功績は大なるものがあつた。

ノモンハン地区高射砲兵隊に對し小松原師団長は感狀を授與してその功績を讃えた。更に有力な高射砲兵力を以てすれば高射砲兵を以て戰場に於ける固定且永続的制空權を獲得することも可能であるとの自信を得るに至つた。其の戦績を仔細に觀察するときは將來の爲め幾多教訓をのこしている。

若干の觀察を述べると次の通りである。

敵機の活動狀態七月一日より九月十五日に至る七十五日間活動せ

る敵驅逐機及爆撃機中ノモンハン戦場高射砲隊の目視した延機數五千二百四十八機であつた。其の飛行の高度は驅逐機は千乃至二千米のものが最も多く爆撃機は七千米以上のものが最も多かつた。敵的ニ觀察せるノモンハン戦場方面高射砲兵の戦績

(イ) 敵機撃墜總數百三十五機内驅逐機九十四機、爆撃機四十一機であつた。總發射彈數は九千三百七十二發で内驅逐機に對し五千三百九十八發、爆撃機に對し三千九百七十四發を使用した。之によると一機撃墜に使用した發射彈數は平均約七十發となり驅逐機に對しては五十八發、爆撃機に對しては九十七發となる。

(ロ) 一機の撃墜所要彈數は敵機の飛行高度によつて異なるが高度四千以下では約四十發程度、五千から六千米では約百發、六千米以上になると約二百發を要した。飛行速度の極めて大なるものに對しては高度が低空の場合に比し二千米以上の場合の方が撃墜所要彈數は少い。是は飛行機の高射砲に對する移動角速度が關

係しているので当時使用した高射砲の旋回速度から生れた結果である。

(ハ) 砲薬の補充量を考慮に入れて使用距離を手控えた場合は使用距離に對する望遠効率が低下して居る。

(ニ) 制空權獲得の爲め必要を高射砲兵の兵力量に就ての一觀察、一九三九年の狀況から十年後の進歩を考慮に入れて前述経路から研究して見ると

燃焼機一編隊に對しては四門編成高射砲九ヶ中隊
駆逐機一編隊に對しては同じく 二ヶ中隊

の集中射撃を要すると思われる。但しその前提条件は

飛行速度毎秒百八米

高射砲隊の威力前記高射砲同様

四五十秒内に各門十二發發射

弾丸経過時間二十秒以内

敵出動機の四分の一を察知すれば目的を達すると假定する。

茲に記述するものは前提条件とノモンハン事件に於ける本戦績とを数量した統計算であるから部隊数少ければ高射砲兵に課する任務又は期待は自ら交らなければならぬ。

(如)高射砲中隊の對戦車射撃は有効である。

鈴木中隊は某日四門で其の陣地に攻撃して来た敵戦車六臺中四臺を撃破捕虜させ二臺は遁走せしめた。

又本作戦中高射砲隊が敵戦車に蹂躪せられた部隊はなかつた。

五戦 例

高射砲隊が敵襲撃隊の大編隊群に對し一舉に大打撃を與えた戦例

(挿圖第一参照)

一 一般の状況

一九三九年七月六日野戰高射砲中隊は某支隊主力を掩護すべき任務を以てイリン基地(川又東北方約十二軒)附近に陣地を占領し

て居た。

2 戦闘経過

(4) 十二時四十五分第一分隊砲手は敵の編隊線に沿い南下せるを發見した。暫くにして其の編隊線は機首を左方に察じ某支隊主力に向い突進せんとするものゝ如くであつた。此の間中隊は正確なる射撃諸元を準備し敵機の威力圏内に入るを待つた。

(5) 敵機高射砲が有効に射てる圏内に入るや中隊長は第一群射(高度一、一〇〇)航速四秒、十六發、航速四秒とは五百米を飛行するに四秒を要すると云う意味であつて機械の構造上出來た言葉である)次で第二群射(高度一、二〇〇)に改め十八發を發射し敵機三を撃墜した。更に第三群射に移らうとしたが敵は高度を二百米に下げて中隊に向い突進し射撃を加うるに至つたから諦め準備してあつた信管二秒の彈丸二十六發を敵機に集中し一撃に五機を撃墜し八機を不時着大破せしめ其の他は西南に潰走

8990

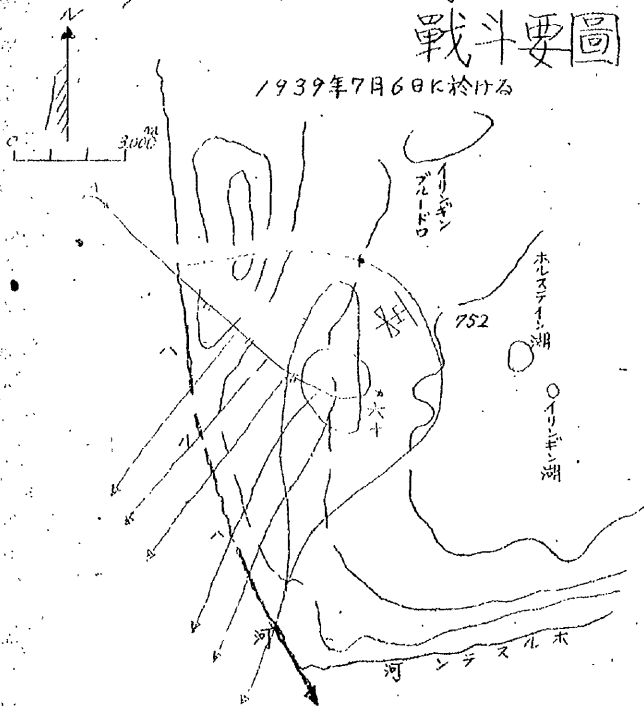
さ
せ
た

一
五

1517

○○中隊752高地附近
戦闘要圖

1939年7月6日K於ける



挿圖
第一

~~0664~~

1518

野戦高射砲隊が一日の戦目に於て十五挺を撃破した(特選第二参照)

4. 一般の状況

小松原兵団は一九三九年七月二十三日ハルハ河右岸の敵に對し攻撃を開始し彼我の飛行隊亦盛んに活躍中であつた。野戦高射砲隊は主力を以て砲兵隊主力一部を以て兵団後方の重要施設を保護すぐき任務を以て二十四日特選第二の態勢にあつた。

2. 戦斗経過

(1) 六時五十分西南方より我が砲兵陣地を襲撃せんとするイー十六型十九機に對し逐次各隊の火力を集中し其の五機を撃破した。

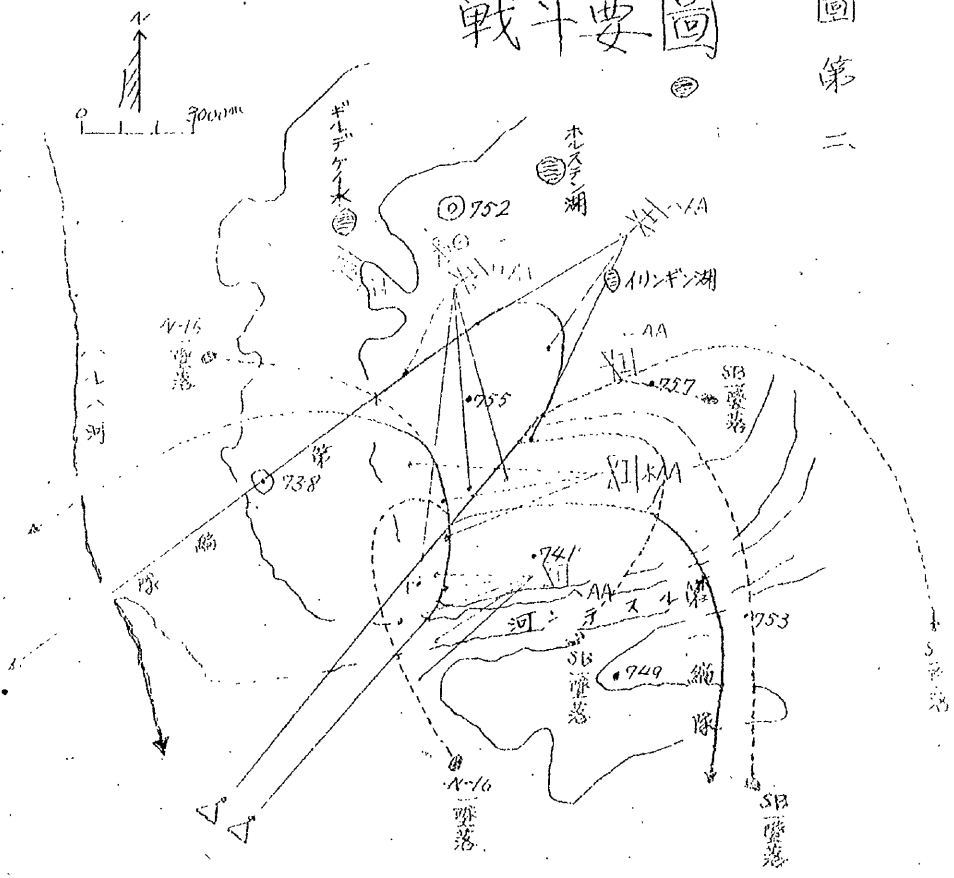
七時五十分一部の中隊をして修正射を行わしめた。

(2) 八時三十分過ぎ西南方より高度七千を以てエスピー二十六機來襲するや射撃を之に集中し三機を撃破した。激戦は先を争うて遁走した。

- 一七
- (イ) 九時四十分イ一十六型十機に掩護せられ高度六千米にて進入するエスベ一十七機を発見した。先づエスベ一第一編隊群に次で第二編隊群及びイ一十六型編隊群の射撃を集中しエスベ一四機イ一十六型二機を撃墜した。敵機は盲爆して退却した。
- (ロ) 十五乃至十七時の高二回に亘りエスベ一編隊群は高度約七千米にて來襲したが何等爲す所なく退却した。
- (ハ) 十九時稍前南方上空真向にイ一十六型の爆音を聞き次で二十機の編隊對地攻撃に移らんとするを発見し直に砲火を集中しその一機を撃墜し他を撃退した。
- (ニ) 尙我が射撃に依り小破不時着せるもの右の外各々数機があつた。

10AAノモンハン戦線 戦闘要圖

挿圖 第二



0667

野戦高射砲中隊敵戦車を撃破した戦例（挿図第三参照）

1. 一般の状況

一九三九年八月二十一日敵はホルステン河左岸地区に於て大戦車団を伴い空地呼應して我が小松原兵団を兩翼より包圍攻撃し來つた。之より先鈴木高射砲中隊は砲兵主力及軍橋防護の任務を以て高地東北方約三軒附近に陣地を占領して居た。

2. 戦闘経過

鈴木中隊は八月二十一日朝來敵機二を撃墜して居た。十四時四十分頃敵戦車四がニゲイソリモト附近に現出した。中隊は之を射撃して撃退したか十九時三十分頃敵戦車三が再び突進し來つた。中隊長は約五百米の緩線上に敵戦車の現出するを待ち一齊に射撃を開始（信管火道を変化せず）し忽ち其の二臺を機挫炎燒させ一臺を撃退した。

二十二日六時二十分戦車三又も前記緩線上に現出し來襲し來つ

たか幹部以下極めて沈着し一舉に之を殲滅せしめた。十五時四十分更に敵戦車を破壊した。此日一方に於て終日執拗に來襲する敵飛行機も能く之を撃退した。

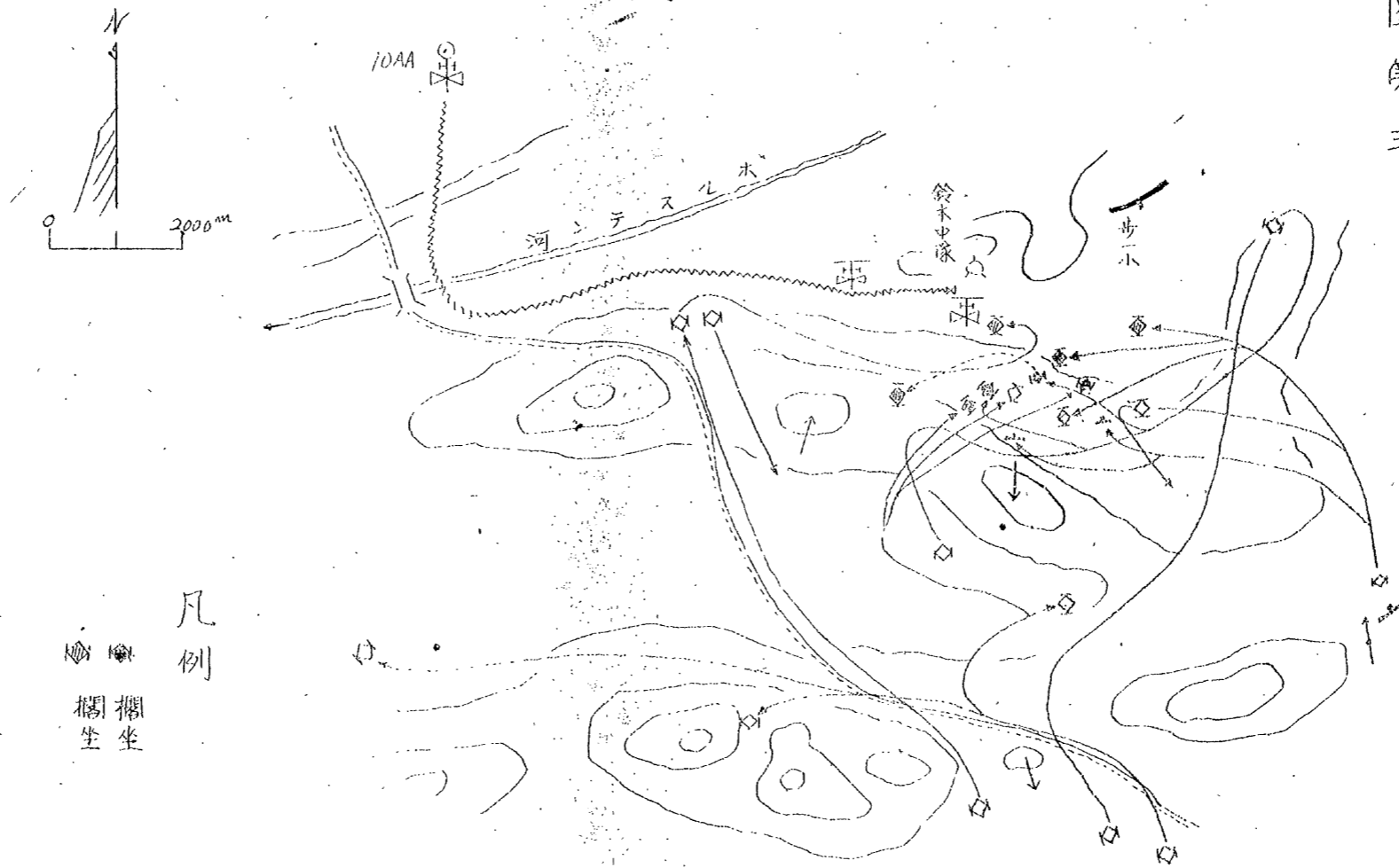
三 二十三日敵は空地協同して攻撃し來つた。

二十時敵戦車六は歩兵を伴い來襲した。高射砲中隊は敵戦車を急襲しその三を攔撃せしめ敵の企圖を挫折せしめた。

鈴木中隊ホルステン河附近対戦車戦闘要圖

1939年8月21日~23日に於ける

挿
図
第
三



凡例
○ 擧
● 擧
生 坐

1524 0670

「附録第二」大連防空戦闘の概要

大連には高射砲第百七十一聯隊が配置されていたが防空戦闘の概要は次の通りであつた。

第一回 B29 一機（一九四三年十月）大連偵察

第二回 B29 二機（一九四四年九月）高度七一八〇〇米にて來襲した。

我高射砲各中隊は之に對して射撃を集中し、命中彈を得たと觀測したが墜落する迄には至らなかつた。

敵機は着葦爆彈六發を投じて西北方に引返した。爆彈は満鉄埠頭構内及市街地に落下し前者は油倉一棟に火災を起し約三時間で消火した。後者は昭和製鋼株式会社の出張營業所三階建鉄筋コンクリート建の二階迄を破壊したが何れも大なる被害は無かつた。

第三回 B29 数機（一九四四年十一月）が來襲しその高度は四一五〇〇〇米で雲が多かつた。各中隊は機を失せず射撃したか命中しなかつた。

米機は大連市東端油倉地域に爆弾六箇を投擲したが被害はなかつた。

第四回 B29 一機（一九四四年十二月）高度九〇〇〇米にて偵察行動を行つた。

第五回 ロツヒード一機（一九四五年五月）偵察の爲來襲した。各中隊は機を失せず射撃したが命中しなかつた。

以上の如く襲撃機は得られなかつたが敏速なる射撃に依り敵機の爆撃行動を制肘し致命的な被害を免れしめた。

「附録第三」 海拉爾に於ける極寒時の高射砲実験射撃記録

当時の主任者入江莞爾、演習員寺尾誠太郎兩人の記憶を綜合したものである。数的成果に就ては若干の記憶違いがあるやも知れぬ。

一、演習の目的、射撃修正量を計算によつて測定する爲め極寒の影響を研究すると共に測高精度に及ぼす極寒の影響を知るにあつた。

二、演習時機一九四〇年二月上旬時々降雪あり。十時に於ける気温零下四十二度。

三、準備及実施概要

一、使用に慣れた火砲を選び内地に於て初速を試験測定したる後海拉爾に送つた。

二、陸地を中心にして約四千米基線四線を定めて精密な測量を実施し四点交合法によつて飛行機及破裂点の高度を測つた。

三、ソンドを使用して経過氣象の経過時間に及ぼす影響を探測した。

四、效力射は計算によつて修正量を定めた。

5. 目標は飛行機であるが陣地の後方を飛行させた。

6. 砲車は普通眼鏡より百八十度反対方向に對物鏡を有するものを使

用した。

7. 弾薬は壕内に保温した。

四 成果の概要

1. 弾丸経過時間は延びた。

2. 破裂点は高度の約一割低くかつた。

3. 測高研究成果は記憶がない。

4. 本演習の成果は高射砲射撃教範改正に際し取入れられた。

五 附隨成果

1. 射撃操作は転把転輪の旋回難及防察具による操作難、信管薬盤旋回難、眼鏡の呼氣による曇等により鈍重であつた。

2. 高度六千米の飛行機は其の通過に際し飛行雲を白く殘すので發見

は容易であつた。

3. 高度六七千米かど記憶するが操縦士失神墜落した。

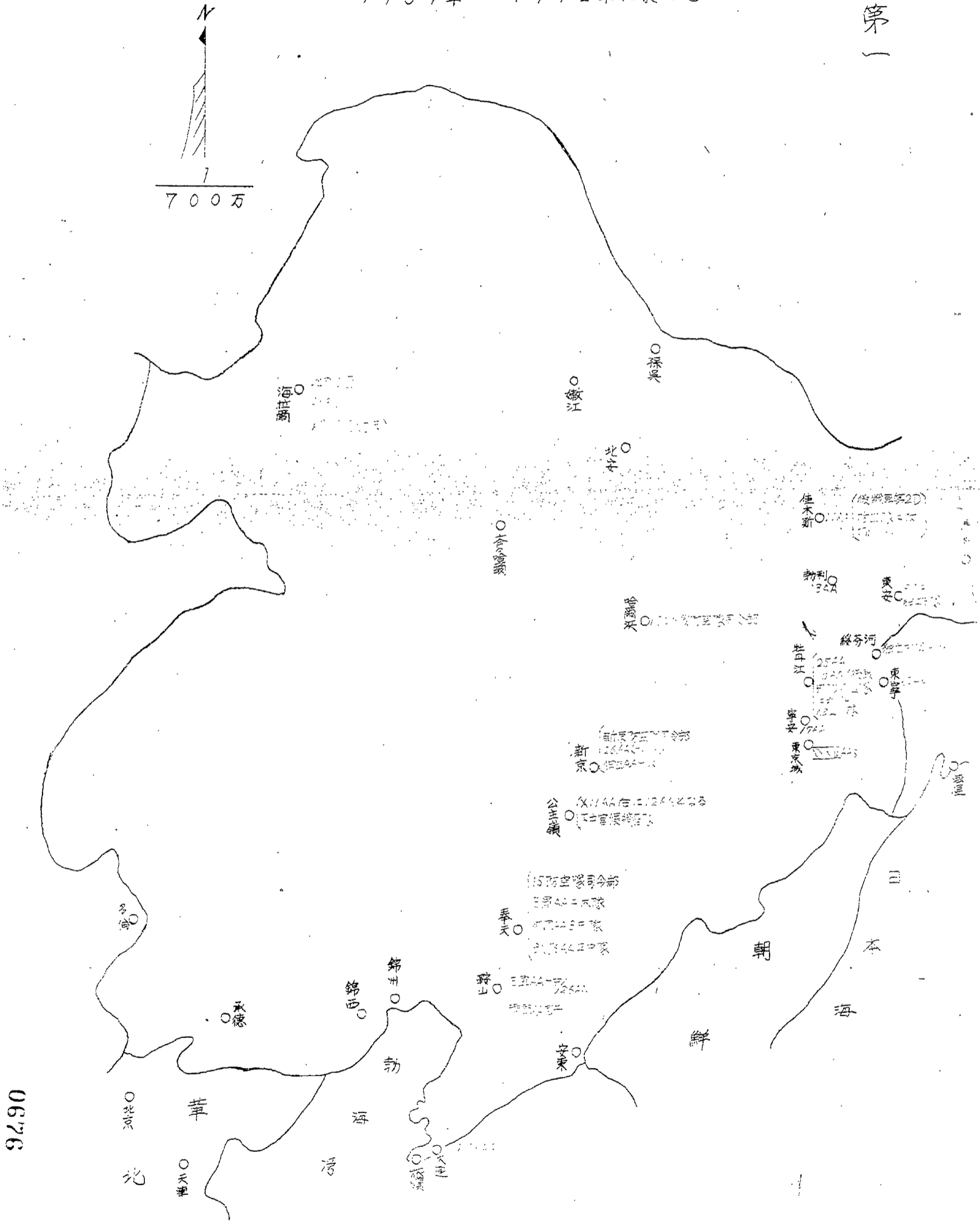
4. 高射砲射撃見學中の幹部候補生一名はスコッチ製手袋を着用し鉛筆を以て筆記中脳貧血症状を起して倒れた。是は凍傷の一種であらう。

関東軍高射砲兵隊配置要圖

1937年～1942年に於ける

附圖第一

1530



9490

附表第一の一

關東軍高射砲兵隊一覽表

(自一九三七年
至一九四二年)

部隊番号	駐屯地	編成完結年月日	編制大要			指揮隷屬系統	備考
			部本	AA	AQ		
15AA 司令部 奉天		一九四一年七月				指揮下部隊 AA第三大隊、第三四大隊 滿軍AA八中隊 鐵道警備隊AA二中	奉天及文官屯 滿軍は奉天、鞍山、本溪湖 鐵道警備隊は撫順、蘇家屯
1AA 司令部 哈爾濱						指揮下部隊 AA二六中、計四中、AQ一六、計三中 滿軍AA八中、AQ四中、江上軍一中 鐵道警備隊AA二中	
26AA	新京	一九四二年七月	1	二大(中)一大(中)二廠		新京防空隊司令部	第五中隊を鞍山に派遣
25AA	牡丹江	一九四二年七月	1	二大(中)一大(中)二廠			
17AA	寧安		1	2			
13AA	勃利		1	2			
9AA	東安	一九三八年	1	2			
11AA	佳木斯		1	2			後戰車第二師國防空隊に改編
關東軍高射砲兵隊司令部	新京	一九三九年					
AS A六中隊	東安、牡丹江、安東、江寧	一九三八年八月					發隊事件に當て内地より出動關東軍に編入 三中隊の駐屯地不明なるも聯隊編成の際漸次此の獨立隊は聯隊に編入せられた
10AA	牡丹江	一九三八年春	1	2		同	聯隊長の指揮する二中「モンハン」後戰車第二師國防空隊に改編
12AA	公主嶺	一九三七年三月	1	2中		關東軍司令官直轄	各中隊は四團編成、其の中隊(但し三中)は三七年八月十五日北支事變に出動、AA一中張鼓峯に三八年八月十日出動、同三中「モンハン」へ
X11AA							12AAに改編

附表第一の二

関東軍高射砲兵隊一覽表

(自一九三七年
至一九四二年)

部隊名	駐屯地	編成完結年月日	編制大要		指揮隷属系統	備
			本部	材料		
171AA 戦車第一師団防空隊	大連	一九四二年九月	4	1	満蒙AA第一旅団(在新京南邊) AA二六六中 AA一六三中	
戦車第二師団防空隊	牡丹江	一九四二年九月二十日	4	2	戦車第一師団長	10AAが改編せられて此部隊となり、 牡丹江附近に展開 九四軍首支那派軍隊に被害
戦車第三師団防空隊	東寧	一九四二年九月二十日	4	2	戦車第二師団長	
防空隊	各地區毎にAA四門(但し第三地區十六門) 察北、察南、察東、察西、察南、五地區				関東軍高射砲兵隊第一旅団 AA六中 関東軍高射砲兵隊第二旅団(在佳木斯) AA四中、AA三中 関東軍高射砲兵隊第三旅団(在公主嶺) 満蒙三九五部隊 新京 AA二中	飛行場掩護に任ず 本編制にて機動力は僅かに 自動車あるのみ、同年十月 七日大連出發南方に転進
防空隊	新東京	一九四一年六月	3	3	関東防衛軍司令部	
防空隊	牡丹江省 蘭崗次で 東京城	一九四一年七月二十日	3	3	関東軍高射砲兵隊第一旅団 AA六中 関東軍高射砲兵隊第二旅団(在佳木斯) AA四中、AA三中 関東軍高射砲兵隊第三旅団(在公主嶺) 満蒙三九五部隊 新京 AA二中	
防空隊	公主嶺	一九四二年九月				

附表第二

野戦防空隊司令部編制表（推定）

階級	人員	種類	数
司令官 少将(大佐)	1	採用自動車	1
司令部附 中(少)佐	1	自動車	1
副官 大(中)尉	1	測車附自動車	2
兵器機 中(少)尉	1	電話機	2組
通信機 中(少)尉	1		
書記	1		
下士官 通信	1		
兵器	1		
兵 傳令手 6	20		
兵 自動車手 2	20		
兵 通信手 12	12		

備考

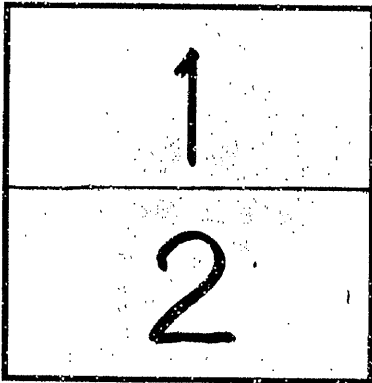
一、本表は關係者の記憶を綜合したもので若干の記憶違いがあるかも知れない
 二、兵20名の内三分の一は上等兵とする又傳令2自動車手6通信手12

修正意見

中央半端の防空隊司令部を廢し軍内高射砲隊を合して師團とし司令部は師團司令部に準じ編成するを可とし特に參謀部に左記を加える
 要がある

指揮班 長	中(少)佐	1
傳令	下士官	3
	上等兵	4
監視班長	下士官	1
	兵	70
電燈警戒班長	中(少)尉	1
	下士官	1
	兵	10
電話班	下士官	2
	兵	2
無線通信班	中少尉	1
	下士官	2
	兵	4

分割撮影ターゲット

分割した部分の撮影順序	
分割撮影した理由	A 3版以上のため
文書等名	独立高射砲中隊の編制表
上記のとおり分割撮影したことを証明する。	

附表第三

獨立高射砲中隊の編制表

區分		編制 (人員)		裝備 (兵器、彈藥等)	
中隊長	大尉一	各部隊長 下士官	人員計	砲臺	砲
中隊長附屬	曹長一 檢校一	兵	人員計	砲臺	砲
指揮小隊長	中尉一	兵	人員計	砲臺	砲
指揮小隊	通信班 觀測班	兵	人員計	砲臺	砲
第一小隊	第一分隊	砲手一 自動車手四	人員計	砲臺	砲
第二小隊	第二分隊	砲手一 自動車手四	人員計	砲臺	砲
第三小隊	第三分隊	砲手一 自動車手四	人員計	砲臺	砲
第四小隊	第四分隊	砲手一 自動車手四	人員計	砲臺	砲
段列長	准尉一	兵	人員計	砲臺	砲
第一分隊		砲手一 自動車手六	人員計	砲臺	砲

0680

附表第四の二

戦車師団防空隊高射砲中隊平時編制表

人		器	
將校	兵	兵	器
長大(中)尉 一	准尉 二	八八式七機野戰高射砲 一	四
附(少)尉 四	曹長 二	觀測車 一	一
	軍伍 一二	九二式二米測高機 一	一
		九〇式航速測定機 一	一
		通信機材(三構成班分) 一	一
		高射機銃 二	二
		牽引自動車 三	三
		九五式小測兼用車 一	一
		裝軌貨車 七	七
		指揮車 一	一
		小銃 二	二
		銃 一	一
合計	一六		一五四

備考 (一) 付特業を示す

戦車師団防空隊高射砲中隊戦時編制表

人		器	
將校	兵	兵	器
長 一	整備班長(准) 二	八八式七機野戰高射砲 一	四
指揮小隊長 一	附屬准尉 一	觀測車 一	一
第一小隊長 二	曹長 二	(内容は平時のものを充当)	
第二小隊長 二	交通掛(軍伍) 二	草輜機銃 一	一
	給與掛(〃) 二	高射機銃 二	二
	觀測班長(〃) 二	自動車 一	一
	通信班長(〃) 二	指揮車 一	一
	高機銃班長(〃) 二	九五式小型(四輪駆動)乗用車 三	三
	第一(第四)分隊長 二	裝軌貨車(自發貨車で代用) 七	七
	兵器掛下士官 一	小銃 二	二
		銃 一	一
合計	一六		一三八

備考 (一) 付特業を示す

合計	將校	長 (大中尉) 一 指揮小隊長 一 第一分隊長 三 第三小隊長 一	准尉	曹長 二 給要掛 一 監視班長 一 通信班長 一 第一分隊長 六 六分隊長 一 警備班長 (准尉) 一 第一分隊長 一 第二分隊長 一 兵器掛 一 交通掛 一	砲手	砲手 (警備班砲手含) 四八 觀測手 七 通信手 一 自動車手 二 衛生兵 二	兵器	九八式二十糎高射機關砲 六 九四式一米對空測遠機 四 九六式六糎對空雙眼鏡 (六機) 二 通信器材 (三機成班分) 一 雙眼鏡 一 車輛無線機 一 指揮車 一 九八式二十糎高射機關砲搭載車 六 九五式小型乘用車 三 自動貨車 (規一彈三燈二) 六 小銃 六一 拳銃 三九
	准下士官							
	兵							
	合計	五	一七	九五	一七	九五		

戰車師団防空隊高射機關砲中隊戰時編制表

合計	將校	長 一 (大中尉) 附 四	准尉	曹長 二 軍伍 一 二	砲手	砲手 (喇叭経技含) 五八 觀測手 一五 通信手 一六 自動車手 三〇 (自動車工手含) 二 衛生兵 二	兵器	九八式二十糎高射機關砲 六 九四式一米對空測遠機 四 九六式六糎對空雙眼鏡 二 通信器材 (三機成班分) 一 雙眼鏡 一 車輛無線機 一 九八式二十糎高射機關砲搭載車 一 指揮車 一 九五式小型乘用車 三 自動貨車 六 小銃 三 拳銃 〇
	准下士官							
	兵							
	合計	五	一五	一四	一	一四		

降参第百三

戰車師団防空隊高射機關砲中隊平時編制表

附表第四の四

区分	將校	准下士官	兵	兵器	車輛
戰車師團防空隊編成基幹部隊(獨立野戰高射砲中隊) 編制表	中隊長 一 (中、大尉)	曹長 一 給與科 一 衛生下士官 一 主計下士官 一 准	傳令 二 衛生兵 二 自動車手 三	小銃 四 拳銃 三 銃 九	乘用車 一 小型乘用車 一
附屬	小隊長 一 (中、少尉)	觀測班長 一 觀測班長 一 通信班長 一 高射機銃班長 一	觀測班 一 觀測班 一 通信班 一 高射機銃手 一 自動車手 一	二米測高機 一 射速測定機 一 高射機銃 一 通信機材 一 三連成機分 一 小銃 一 拳銃 一 銃 四	觀測牽引車 一 觀測車 一 自動貨車 一
指揮小隊	小隊長 一 (中、少尉)	第一分隊長 一 第二分隊長 一	砲手 二 自動車手 二	七糎野戰高射砲 二 小銃 二 拳銃 二 銃 三	自動索引車 二 自動貨車 二
第二小隊	小隊長 一 (中、少尉)	第三分隊長 一 第四分隊長 一	砲手 二 自動車手 二	七糎野戰高射砲 二 小銃 二 拳銃 二 銃 三	自動索引車 二 自動貨車 二
列	第一分隊長(准) 一 第二分隊長 一 第三分隊長 一 兵技下士官 一 火工 一	砲手 二 自動車手 二	兵技兵 二 砲手 二 輕重兵 一 自動車手 二	小銃 六 拳銃 四 銃 三	自動貨車 九 輕修理自動車 一組
計	五	一七	一四七	一六九	二四
合計				一六九名	

計		班 備 整	隊小三才	隊小二才	隊小一才	隊小揮指	屬 耐	務 將	人	員
五	天	中少尉 大尉 四一	全 一	全 一	小隊長 一	小隊長 一	中隊長 一	將校		
		准尉 計 一	班長 准尉 一	才五分隊長 才四分隊長 一	才五分隊長 才四分隊長 一	監視班長 觀測班長 通信班長 一	曾長 衛生係 主計 一	准下士官		
一 三〇	一 〇九	砲手 觀測手 通信手 自動重手 銃工兵 銃工兵 輜重兵 衛生兵 剛手 一 四 三 二 二 二 四 二 二 二 四 一	自動重手 砲手 銃工兵 銃工兵 輜重兵 自動重手 一 四 六 四 二 二 四	全 右	全 右	砲手 自動重手 一 四 二	司令 衛生兵 剛手 自動重手 一 一 一 一	兵		
		小銃 遠鏡 測鏡 雙眼鏡 電話機 被覆線 (器械三構隊分)	小銃 銃 銃	全 右	全 右	小銃 銃 九〇式三挺高射機銃 九六式六挺高射機銃 九二式電筒機 (通信器械三構隊分)	小銃 銃 二 三	兵 器		
		小型乘用車 塔載車 自動貨車 修理車 一 組	自動貨車 彈藥車 糧秣車 修理用自動車 一	全 右	全 右	九〇式三挺高射機銃 砲塔載車 一 二	九五式小型乘用車 一	車 輛		

附表第四の六 独立機甲砲中隊編制表

附表第五

種類	超短波警式機								超短波標定機						備考
	甲				乙				一型	二型	三型	四型	密型		
器名	三ツト	二ツト	一ツト	四ツト	50キロワット 要地用 女子6	50キロワット 野戦用 女子7	女子18	高 測定装置 女子20	50キロワット 航空基地用 女子35	女子1	女子2	女子3	女子4	女子31	女子24
目的 (用途)	要地周辺に配置してドップラー方式による警戒を行う				海岸要地に固定設置し、航空機の早期発見と位置測定を行う	軍用機に於いて、無線電波の検出と位置測定を行う	自動偵知機能に備え、航空機の位置測定を行う	要地用警戒機として、高度測定と位置測定を行う	精度良好な航空機の位置測定を行う	要地に設置し、高射砲の射重測定を行う	要地に設置し、高射砲の射重測定を行う	要地に設置し、高射砲の射重測定を行う	要地に設置し、高射砲の射重測定を行う	要地に設置し、高射砲の射重測定を行う	要地に設置し、高射砲の射重測定を行う
装備場所	要地周辺地区				海岸	野戦	要地用補助山岳地帯	海岸	航空基地 海岸	高射砲・地					
長さ cm	750~500				442, 417 375, 375	300	320, 307 294, 283	442, 417 375, 375	567	150	150	385	150	150	51.7
送信回路方式					及結合	及結合	及結合		及結合	及結合	及結合	及結合	及結合	及結合	空洞共振
送信機出力 kW	持続 " " " "				50	50	50		50	10	10	50	10	10	10
空中線 型式					送: 2x4 (2-140) 受: 1x2 (水平)	4x3 (水平)	4x6 (水平)	測距 1x2 測角 2x4 測高 (水平)	送: 4x4 測距測角 4x2 測高 2x4	送: 入木式 垂直受波機	送: 3/14 ポール (水平)受: 菱形	送: 4x2(水平) 測距測角 1x1 測高 2x2	送: 八木式 受: 菱形 入木式	短距離用 入木式 垂直	備心回車 3m 抛物鏡
受信機 型式					ME-664A	UN-954	UN-954	UN-954	ME-664A	UN-6306	UN-954	ME-664A	UL-6306	UL-6306	KE-3
有効距離 km	20	75	150	300	300	250	250	100	100	20	20	40	20	40	40
精度 km					10	10	10	2	2	1.5	1.5	1.5	1.0	0.6	0.5
重量 kg	100	2,000			10,000	13,000 + 1,000 自動偵知 に装備	4,000	2,000	4,000	2,500	2,500	4,000	2,500	2,500	1,500
完成 期日	昭16.1	"	"	"	昭17.6	昭18.5	昭19.1	昭19.5	昭20.3	昭18.1	"	昭18.11	"	昭19.8	昭20.6
製作 会社	日富大				住友 日本無線等 松下	岩崎通信	岩崎通信 東芝	安立	住友	"	東芝	住友	東電	住友研	日本無線
価格 円					300	60	400	50	30	25	25	120	70	40	3
他 状況	完成				"	"	"	実用	"	実験	"	"	"	実用	試作完成

附表第六

旧日本陸軍に於て研究或は實用された電波兵器の類別表

電波兵器

地上用	甲 3W 10W 40W	乙 多子6. 多子7. 多子18. 多子20. 多子35
艦船用	タセ1. タセ10. タセ2.	
航空機用	タキ11型 タキ11Y型	
電波標定機	多子1. 多子2. 多子3. 多子4. 多子31. 多子24	
電波誘導機		
航空機用	タキ2	
軍機標定機	多子13	↑ ↓ タキ15型
軍機標定機	多子28	↑ ↓ タキ30
味方識別機	多子17	↑ ↓ タキ151型
双曲線航法装置	多子39	↑ ↓ タキ39
電波暗識機	タキ14	
電波高度計	タキ11. タキ13	
電波探索機		
航空機用	タキ4. タキ5. タキ6	
陸上用	多子30.	
電波妨害機		
航空機用	タキ8. タキ23.	

新表等之

備考	94式				通信距離km	高射砲隊の使用 無線機諸元表
	五号	号内	三号乙	二号乙		
<p>一 本表に示す諸機は高射砲隊の使用した無線機の主要なものに於ては番号及び五号が主体である。</p> <p>二 運搬法は概ね本表の運搬法を示し高射砲隊に於ては適宜互換し積載した。</p>	10	50	50	150	送信機	高射砲隊の使用 無線機諸元表
	900~5,000 (933~60)	400~5,700 (750~52.7)	400~5,700 (750~52.7)	950~6,575 (316~45)	送信機	高射砲隊の使用 無線機諸元表
	400~5,500 (750~546)	300~5,700 (1,200~52.7)	350~6,000 (357~50)	140~15,000 (2,143~20)	受信機	高射砲隊の使用 無線機諸元表
	2	2	5	7	調性	高射砲隊の使用 無線機諸元表
	7	7	7	7	変調	高射砲隊の使用 無線機諸元表
	概15	15	20	20	帯域	高射砲隊の使用 無線機諸元表
	15x1	10x2 20	10x2 20	20x4	川	高射砲隊の使用 無線機諸元表
	概13	5	10	50	出力	高射砲隊の使用 無線機諸元表
	UZ120x1	UY478x2 UX202Ax2	UY510Ex1	UX472x1 UV314x1	使用管	高射砲隊の使用 無線機諸元表
	方式	方式	方式	方式	方式	高射砲隊の使用 無線機諸元表
	VF134x1 VF109Ax1 UZ133Dx1	VF134x2 UZ135x1 VF111Ax1 VF109Ax1 UY133Ax1	VF134x2 UZ135x1 VF109Ax1 UZ133Dx1 VF134x2 VF135x1 VF109Ax1 UZ133Dx1	VF134x2 UZ135x1 VF111Ax1 VF109Ax1 UY133Dx1	使用管	高射砲隊の使用 無線機諸元表
	方式	方式	方式	方式	方式	高射砲隊の使用 無線機諸元表
	低周波増大 中周波増大 高周波増大 変調増大 受信増大 送信増大	低周波増大 中周波増大 高周波増大 変調増大 受信増大 送信増大	低周波増大 中周波増大 高周波増大 変調増大 受信増大 送信増大	低周波増大 中周波増大 高周波増大 変調増大 受信増大 送信増大	方式	高射砲隊の使用 無線機諸元表
	一人用 送受信機	二人用 送受信機	二人用 送受信機	二人用 送受信機	送信機	高射砲隊の使用 無線機諸元表
	18W 150T 200mA 6T 1A	14W 400T 100mA 8T 3A	40.5W 500T 600mA 7T 1.5A	二人用 送受信機	受信機	高射砲隊の使用 無線機諸元表
平角三号x2 B-八号x4	平角三号x1 B-八号x3 C-九号x1	平角三号x1 B-八号x4 C-九号x1	平角三号x2 B-八号x1 C-九号x1	電源	高射砲隊の使用 無線機諸元表	
運搬法	運搬法	運搬法	運搬法	運搬法	高射砲隊の使用 無線機諸元表	
概5~6	概10~20	概10~20	約20~30	人数	高射砲隊の使用 無線機諸元表	
約40	約160	約160	約500	重量	高射砲隊の使用 無線機諸元表	

0690

